

社会科教育研究社版『社会科教育』（1947～1951年）に関する考察

茨木 智志

はじめに

本稿の目的は、社会科教育研究社版『社会科教育』（以下、本誌とする）について、基本的な書誌情報の整理、執筆者の分析等を通じて、その特徴および社会科教育史上に果たした役割を検討することにある。そのために、本誌に現われた各種の情報とともに、元編集者（佐藤伸雄氏）への聞き取り¹を活用した。

本誌は、山崎喜与作を社長兼主幹とする社会科教育研究社により、1947（昭和22）年5月から1951（昭和26）年5月までの4年余りの期間に発行されていた月刊誌であり、戦後初の（即ち日本初の）社会科教育の全国誌であった。

1. 『社会科教育』の創刊

1-1. 本誌の発行社、編集者

本誌の発行は、「社会科教育研究社」による。社会科教育研究社は、千代田区富士見町1-12（途中から表記は九段1-12となる）の民家を社屋としていた。山崎喜与作が社長であり、主幹（編集長）を兼ねていた。他に数学の問題集を発行する「学泉社」も同所にあり、これも山崎が社長を兼ねていた。また、「代理部」として学用品が本誌の広告に出されている。社会科教育研究社は、本誌の他に、関連した多くの書籍も発行していた（稿末の資料1参照）。

山崎喜与作²は、元暁星中学（旧制）³の地理教師であった。戦時中に書いたもの⁴から教職追放を受けるかもしれないということで、暁星中学を辞職して、出版社を始め

1 佐藤伸雄氏への聞き取りは以下の通り。「《インタビュー記録》歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」『歴史教育史研究』2号、2004年10月（2004年1月6日のインタビューの記録）。および2006年6月24日の電話での聞き取り。

2 山崎喜与作について、佐藤氏によれば、福島県会津出身であること、当時、40歳代ではなかったかということ以外に、詳しいことは不明である。本誌の終刊後は、日本地理教育学会会誌である『新地理』第1輯（1952年4月）～第4輯（1953年5月）の「発行者」に名前がある（編集者は日本地理教育学会代表内田寛一、発行所は帝国書院。ただし次号である1953年10月の第2巻第1号から「発行者」は同学会に改められている）。同学会の「会員名簿」（『新地理』第1輯、1952年4月）、および「日本地理教育学会会員名簿（1954年9月1日現在）」（『新地理』第3巻第2号、1954年9月）では、「帝国書院」が勤務先となっている。

3 現在の暁星学園中学・高等学校（東京都千代田区富士見）。

4 詳細は不明であるが、戦前の山崎には次の著作がある。山崎喜与作著『時局に即応せるアジア地理図説』、西東社、1940年。

たとのことである。1949年4月からは、3月に新制暁星高校を卒業した佐藤伸雄氏が入社して、山崎と二人で編集に従事することになる⁵。佐藤氏にとって、山崎は暁星中学での恩師に当たる。佐藤氏は、本誌が終刊する直前の1951年3月まで2年間、在職した⁶。

1-2. 本誌の創刊

1947年5月の創刊号に、山崎による「発刊の辞」が掲載されている(資料2参照)。ここでは、進行する「わが国の教育に画期的な大改革」の中でも「社会科の設置」の重要性を主張すると共に、社会科をめぐる「解決すべき困難」を指摘している。特に「東京都その付近」と「地方の中学校や小学校」との情報の差を埋めることを、本誌の役割としている。そのため、はじめに「文部省で企画された事や中央の諸研究機関で研究された事を一般に広く報告し、その宣伝を援助する」ことを進め、その後に「地方研究家の論文や意見を紹介して、社会科をよりよきものに練りきたえて行きたい」と述べている。この方針が、後述するように本誌編集の基本となっている。

本誌の創刊された1947年5月は、4月に6・3・3制の新学制に基づく小学校・中学校が発足したときであった。新学制の中心的な役割を担った新しい教科である社会科は、教科書・学習指導要領が間に合わず、9月からの実施とされていた。本誌は、社会科の実施が始まる前に、発刊されている。二学期から、“未知”の社会科の授業を行うべき教師たちからは、大いに歓迎されたことが想像できる。また、敗戦後の混乱も相まって情報伝達手段の乏しかった当時において、本誌は、社会科の情報の送り手である、社会科実施のために準備していた文部省や占領軍の関係者にも歓迎されたものと考えられる。ただし、発行部数に関する記録は存在しない⁷。

このようにして、本誌は「企画以来、二ヶ月」(本誌創刊号「編輯後記」)で発刊された。

2. 『社会科教育』の発行

2-1. 本誌の発行状況と内容構成の概要

1947(昭和22)年5月から1951(昭和26)年5月までの4年余りの期間に、以下のように、第38号まで発行された。B5版で、表紙・裏表紙のみ二色または三色刷りであった(最終の第38号のみがA5版)。

⁵ 本誌の「鳴海」の記名は佐藤氏によるもの。また、「稲谷」は山崎によるものと推測される。

⁶ 佐藤伸雄氏は、1930年生まれで、歴史教育者協議会の活動に従事してきた(2004年まで委員長)。佐藤氏については、前掲「《インタビュー記録》歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」などを参照。

⁷ 佐藤氏は、「社会科教育」と題した雑誌は存在しなかったこともあり、当初はとても売れていたらしいこと、佐藤氏が入社後の時期では、徐々に発行部数が減少していたと推測されることを述べている。

表1 『社会科教育』の発行状況および特集・ページ数・価格等

号数	発行年月日	特輯（特集）	頁数	価格	その他
創刊号	1947年5月1日	—	40	15	B5版(以下同じ)
第2号	6月1日	小学校の社会科	40	15	
第3号	7月1日	中学校の社会科	40	18	
第4号	8月1日	学習研究号	36	18	
第5号	9月1日	単元の取扱	36	18	
第6号	10月1日	学習効果判定号	32	18	
第7号	11月1日	教科書研究号	32	18	
第8号	12月1日	児童研究号	32	18	
第9号	1948年1月1日	教材構成号	32	20	
第10号	3月1日	家庭連絡号	32	20	
第11号	4月1日	学習動機と興味	32	25	
第12号	5月1日	劇的表現	32	25	
第13号	6月1日	集団活動	32	30	
第14号	9月1日	手による表現	32	30	
第15号	10月1日	コア・カリキュラム	32	30	
第16号	12月1日	史的教材取扱	32	30	
第17号	1949年1月1日	地理的展開	32	30	
第18号	2月1日	農村社会科	40	40	
第19号	3月1日	特別活動	40	40	
第20号	5月1日	カリキュラム	40	40	
第21号	6月1日	学習能力	40	40	
第22号	7月1日	特殊児童と社会科	48	50	
第23号	8月1日	コア・カリキュラム批判	48	50	
第24号	9月1日	単元学習	48	50	
第25号	10月1日	学校図書館と社会科	48	50	
第26号	11月1日	現場学習	48	50	
第27号	1950年1月1日	職業教育と社会科	48	50	
第28号	2月1日	企画・構成活動	48	50	
第29号	3月1日	社会科と評価	48	50	
第30号	5月1日	歴史教育	52	50	以下、社会科教育協会編集
第31号	6月1日	視覚教育	48	50	
第32号	8月1日	自由か、規律か	52	50	
第33号	9月1日	教科書の批判と取り扱い	48	50	

第 34 号	10 月 1 日	社会科と国語教育	48	50	
第 35 号	12 月 1 日	社会科と郷土研究	48	50	
第 36 号	1951 年 2 月 1 日	社会科と新聞	48	50	
第 37 号	3 月 1 日	進学と就職	48	50	
第 38 号	5 月 1 日	新単元をどう生かすか	64	55	A5 版

注：創刊号から第 38 号の『社会科教育』（社会科教育研究社）により作成。価格の単位は円である。

「毎月一日発行」とされているが、この間の 11 ヶ月分（1948 年 2 月・7 月・8 月・11 月、1949 年 4 月・12 月、1950 年 4 月・7 月・11 月、1951 年 1 月・4 月）の発行がない。事情の詳細は不明である⁸。

各号は、「特集」（29 号までは「特輯」と表記している）を組むのが基本であった。本誌の特徴の一つは、この特集にある。特集は、社会科授業の構想から教材、授業方法、評価、そして関連する教育活動に及んでいる。そのつど、特集に関連して、専門家による論考や各校の実践等を集めている⁹。ある意味で、今日まで続く学校教育活動のあらゆる要素が取り上げられている。

記事は、「巻頭言」、理論的な論説、社会科教育を中心とした実践報告、社会科教育に関わる種々の最新情報、時事評論、書評・文献紹介、投稿意見、編集後記、その他で構成されている。中心は論説と実践報告である。

巻頭言は第 1 頁で特集に関する論評を掲げるものとして、主幹の山崎を主な執筆者として、第 30 号（1950 年 5 月）まで続けられた。第 31 号から編集形態を変えたためか（後述）、巻頭言はなくなっている。理論的な主張を展開する論説は、文部省、中央研究機関、高等教育機関において社会科教育に関わる人々によって担われている。ただし、特集によっては、各分野の第一人者による論説も加えられている。実践報告は、指導計画案から、実践の記録まで、小中高校の教師や各地の研究会により執筆されている。これらの執筆者については、次章で検討したい。最新情報としては、社会科教育に関わる研究会・協議会の動向、各地の学校の取り組み、外国での研究動向に加えて、学校教育法などの法令、学習指導要領（その中間発表を含む）なども紙面を割いて紹介されている。時事評論に当たる記事は、様々な名称で掲載されていたが、第 30 号以降は、「時評」として終刊まで継続された。書評・文献紹介も第 8 号（1947 年 12 月）以降、様々な名称で継続された。投稿意見は、最終の第 38 号（1951 年 5 月）を除いて、特定の欄を設けて掲載してはいないが、短文の紹介は当初から継続されている。なお、「投稿原稿の募集」は創刊号以来、呼びかけられている。ただし、原稿が

⁸ 佐藤氏の推測では、記憶にないが、特に経営状態によるものではなく、資金・原稿・用紙のそれぞれに原因があったのではとのことである。また、佐藤氏が入社する前には、占領軍の事前検閲があったため、これも原因の一つではないかと推測している。

⁹ 当時の発言として、「常にその時々の問題にふれた編集の行われているのは山崎主幹の全国行脚のたまものである」（金子孫市「教育雑誌概観」『社会と学校』第 3 巻第 7 号、1949 年 7 月、70～71 頁）という指摘がある。

依頼によるものか、投稿もしくは持込みによるものかは明記されていない¹⁰。編集後記は、山崎により書かれている。

その他として、座談会がある。第10号(1948年3月)以来、8回行われている¹¹。第36号(1951年2月)では、「新聞について—新聞のよみ方と学校新聞—」として新聞部員である8人の中高生を集めての座談会を行っている。また、社会科教育とは直接、関係のない米国の教育論文の翻訳が多く掲載され、「口絵」として様々な米国の教育現場の写真が巻頭に掲載されている。これらは占領軍から提供された記事や写真であった¹²。

2-2. 本誌の編集の形態

基本的には山崎を中心とする編集であったようである。

創刊号には「編輯同人」として以下の4名が列挙されている。

勝田守一	尾崎卍四郎	海後勝雄	山崎喜与作
------	-------	------	-------

勝田、尾崎は、文部省で社会科に関係していた人々であり、海後は、中央教育研究所員であった。「発刊の辞」にあるように、文部省での企画や中央の諸研究機関での研究を広めるという意図が、「編輯同人」の人選に窺える。ただし、「編輯同人」の記載は、第3号(1947年7月)までである。尾崎や海後が、その後、本誌を舞台に精力的な執筆活動が続けたのに対して、勝田が第2号までで本誌での執筆を止めていることと、なんらかの関係があるように思われるが、詳細は不明である。

その後、第30号(1950年5月)に「謹告」として、「社会科教育協会の編集委員にその編集を委託する」旨を述べている(資料3参照)。その編集委員は以下の通りである。「新進気鋭の少壮学者」と形容されている。

石田龍次郎 (一ツ橋大教授、〔地理〕)	尾鍋輝彦 (成城大教授、〔西洋史〕)
高橋碩一 (歴教協書記長、〔日本史〕)	福武直 (東大助教授、〔社会学〕)
松島栄一 (史料編纂所員、〔日本史〕)	南博 (日本女子大教授、〔心理学〕)
宮原誠一 (東大助教授、〔教育学〕)	和歌森太郎 (〔東京〕文理大教授、〔日本史〕)

注：これに山崎喜与作が入る。第33号(1950年9月)から岡津守彦が加わる。〔 〕は引用者による補足である。

¹⁰ 佐藤氏によれば、原稿の基本は、依頼によるものであったと記憶しているとのことである。

¹¹ 10号、14号、15号、26号、28号、33号、36号、38号に掲載されている。

¹² これらは、佐藤氏自身の経験によれば、事後検閲で雑誌を提出するときに、日系二世の軍人から掲載するようにと渡されたものである。障害児教育の論説が多く、『社会科教育』の編集部としては「迷惑」であったが、断れる雰囲気ではなく、暁星高校の英語教師に依頼して翻訳してもらい、なるべく掲載したとのことであった(ただし、原稿料を求められることはなかった)。

そのため、第30号から、表紙に「社会科教育協会編集」と書かれるようになった。佐藤氏によれば、高橋碩一¹³が山崎に進言して組織されたものであるとのことである。「謹告」を見ると、「社会科に関連ある諸科学者を中心」として、「各地の実際教育者と共に社会科教育の研究団体を組織」していく意図が示されている。同号の「編集後記」には、「社会科教育協会」の「組織事業、地方会員、支部等の詳細な規約」が予告されているが、実際の活動は、現時点では、確認できていない。そのため、「社会科教育協会」そのものは、教育団体として事実上、あまり意味を持たなかったものと考えられる。ただし、佐藤氏によれば、編集会議は月に何回か、行われており、また、第30号からの(Q)などのローマ字の記名は、この編集委員によるものであるという¹⁴。発行部数の減少などに対応して、内容の刷新を図り、社会科教育の全国組織の中核となることで、その機関誌化を試みたものと考えられる。

本誌は、占領下で発行された雑誌であったために、米軍の検閲を受けている。当初は、校正刷りでの提出が求められた事前検閲が行われた。米軍の検閲は、伏字や空白での掲載が許された戦前の日本の検閲よりも厳しく、検閲の痕跡を残すことを許さないものであった。本誌でも削除を求められた例があり¹⁵、そのため、本文中の不自然な箇所に入れて、発行したこともあった。後に、事後検閲に改められると、完成した雑誌を提出するだけとなり、特に問題となることはなくなったという¹⁶。

2-3. 本誌の終刊

約4年を経て、1951年5月の第38号をもって終刊となった。しかし、第38号に、終刊を予測させる文言は全くない。そのため、終刊の理由は、はっきりしない。出版事情が劣悪な時期であったため、急な終刊は珍しくなかったとも言えるが、ここでは、本誌をめぐる教育メディアの状況を確認しておきたい。敗戦後、数多くの教育雑誌が発刊もしくは復刊される中で、本誌が発刊された1947年5月に「社会科」と銘打った全国誌は存在しなかった。その後、各地域を含め、「社会科」の発刊が進められた。何よりも本誌にとって影響が大きかったのが、『カリキュラム』の創刊であった。1948年10月にコア・カリキュラム連盟が結成され、1949年1月に『カリキュラム』第1号（誠文堂新光社発行）が月刊誌として創刊された。『カリキュラム』は第1号を1万部印刷した後に、5000部増刷したほどの支持を集めた¹⁷。1年後（1950年）には

¹³ 高橋碩一（1913～1985年）は、暁星中学で山崎の同僚であった。

¹⁴ 佐藤氏によれば、(Q)は尾鍋輝彦であるという。

¹⁵ 本誌への米軍の検閲は、プランゲ文庫で確認が可能である。

¹⁶ 本誌への検閲については、前掲「《インタビュー記録》歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」、45頁。本誌のどの号から事後検閲に変更されたのかは、確認できていない。また、占領軍による検閲については、松浦総三『戦中・占領下のマスコミ』（大月書店、1984年）が詳しい。

¹⁷ 中野光「解説『カリキュラム』と生活教育運動」コア・カリキュラム連盟、日本生活教育者連盟編『カリキュラム 付録・解説・総目次・固有名詞索引』誠進社、1982年、190頁。

3万部を発行し、この時期がピークであったという¹⁸。同連盟の発起人そして会員の名簿を見ると、『社会科教育』執筆の中心を担っていた人々、さらには学校が多く含まれている¹⁹。『社会科教育』にすれば、多くの執筆者と小学校教師を中心とする多くの読者を奪われた形になったものと思われる。前述した1950年5月からの本誌の「社会科教育協会」による編集も、コア・カリキュラム連盟への対応と見なすことができる。それでも、中学や高校の社会科教師は対象として残されていたはずであるが、1951年に入ると、小学館が『中学教育技術』を3つに分けて『中学教育技術 社会・国語・英語』を発行し、全国歴史教育研究会が『歴史教育評論』（科学評論社）を、実業之日本社が『社会科歴史』をそれぞれ創刊するに至った。このような状況が、本誌の終刊の背景にあったものと考えられる²⁰。

3. 『社会科教育』の執筆者

本誌に書かれた記事をすべて合計すると、概算ではあるが、660余りとなる。無記名者を除いた執筆者（学校・研究会等を含む）の合計は、311である。ここでは、本誌の記事の中心となる論説と実践報告（指導計画案を含む）の執筆者を取り上げて、分析の対象とする。ただし、論説と実践報告の定義は、厳密には定めがたいため、はなはだ恣意的な作業であることを予めお断り申し上げる。

論説と実践報告は、254の執筆者により、415本が掲載されている。その所属等による内訳は次のとおりである。

表2 『社会科教育』における論説・実践報告の執筆者の内訳

所属等	人数	本数	割合
文部省関係者	19人	56本	13.5%
中央教育研究所員	5人	29本	7.0%
大学等の研究者	42人	67本	16.1%

¹⁸ 同前、199頁。

¹⁹ 表3の論説・実践報告の執筆回数4回までの者について、コア・カリキュラム連盟との関係を見ると、倉沢剛（役員）、海後勝雄（発起人、役員、幹事長）、重松鷹泰（発起人、役員・副委員長）、馬場四郎（発起人、役員）、金子孫市（幹事）、日下部しげ（勤務先が加盟校）が該当している（『カリキュラム』第1号、1949年1月）。中野光・同上書（191頁）によれば、『カリキュラム』第1号から第5号までに誌面で公表された加盟校（団体を含む）の数は全国で190団体、その内、附属学校が49校に及んでいる。その加盟校のほとんどは小学校であり、加盟者のほとんどは小学校教師であった。なお、『カリキュラム』第2号（1949年2月）の加盟者名簿には、「社会科教育研究社 山崎喜与作」の名前も掲載されている。

²⁰ 山崎喜与作が「帝国書院編集部」として本誌終刊後に書いた「社会科の課題と教科書」という文の「社会科の現状」という項では、「このコア・カリキュラムは成長の途にある社会科を攪拌したきらいがあり、且つ社会の批判を受けて、もう下火となった。昨今は、社会科も前述したような沈殿状態となって、むしろ自覚ある教師といわれる一部の教師が賢明であつたかのように謳われている」（『新地理』第1輯、1952年4月、48頁）とまとめている。

小学校	附属小学校教師	30人	43本	10.4%	(小学校小計) 23.6%
	附属小学校	3校	3本	0.7%	
	公私立小学校教師	33人	42本	10.1%	
	公私立小学校	10校	10本	2.4%	
中学校	附属中学校教師	5人	7本	1.7%	(中学校小計) 11.6%
	附属中学校	2校	2本	0.5%	
	公私立中学校教師	31人	37本	8.9%	
	公私立中学校	2校	2本	0.5%	
高等学校教師		12人	23本	5.5%	
研究会		11団体	12本	2.9%	
その他		11人	17本	4.1%	
不明		13人	20本	4.8%	
編集部		3人	16本	3.9%	
米国人等	占領軍関係者	3人	6本	1.5%	
	その他の米国人等	19人	23本	5.5%	
合計		254	415本	100.0%	

注：創刊号から第38号の『社会科教育』（社会科教育研究社）により作成。論説・実践報告に分類したもののみを対象としている。一部の共著者は一名として数えた。所属が変更している場合は適宜、判断した。高等学校は旧制中等学校を含む。「割合」は論説・実践報告の合計本数に占める割合である。

ここに見られるように、大学等の研究者、文部省関係者、中央研究機関所員らの論説と小中高の教師らによる実践報告で、本誌の紙面は構成されていた。社会科を題名に掲げる本誌は、新教育の中心であった社会科を推進する重要な役割を担っていたことが窺える。

実践報告に関しては、全体的な学校数を考慮すると、本誌を利用しての附属小学校教師による実践報告の発信が目立つ。また、公立小学校でも東京都港区の桜田小学校の教師による報告は特に多い。小中学校の教師による報告は、本誌発行の全期間に及び、さらに内容的にも総合的な社会科の教育を対象としているものが大半を占めている。これに対して、高校の教師による報告は、本誌発行の後半が中心で、歴史教育関係が大半を占めている。前述した編集形態の変更にかかわり、歴史教育者協議会で活動する教師の積極的な参加が反映しているものと思われる²¹。

論説に関しては、すべての号に大学等の研究者のものが掲載されている。人数に比

²¹ 編集部には佐藤伸雄氏が、暁星高校の恩師であった高橋碩一との関係で、発足当初（1949年7月）から歴史教育者協議会に参加しており、佐藤氏が退社するまでの2年間、同協議会の事務所は社会科教育研究社に置かれていた。

して、掲載本数が大きな割合を占めている文部省関係者と中央研究機関（中央教育研究所）所員については、本誌の発行期間の前半に、論説の発信の中心がある。これは3名の占領軍関係者²²についても同様である。このことは、前述した「発刊の辞」で述べられた方針を反映している。社会科の成立と展開を、教育メディアから考察するのに興味深い素材を提供している。論説・実践報告の執筆回数の上位者をまとめたのが以下の資料である。これまでに指摘したことの一部が現われている。

表3 『社会科教育』における論説・実践報告の執筆回数上位者

回数	氏名(所属)	執筆号	
		前半	後半
11	山崎喜与作(本誌主幹)	1,2,7,14,17,18,19	23,27,36,37
10	倉沢剛(中央教育研究所)	4~9,11,12,	26,31
9	上田薫(文部省)	1,6,8,14,15,18	24,25,32
8	班目文雄(東京高等師範学校)	3,7~9,13,16,17,19	—
7	尾崎厩四郎(文部省)	1~3,7,17	35
7	海後勝雄(中央教育研究所)	1,9,13,15,	20,25,26
6	重松鷹泰(文部省)	1~4,9	23
6	矢口新(中央教育研究所)	3,5,7,18	23,29
6	小山昌一(東京第二師範附属男子部小学校)	8,10,12	21,22,33
6	小島仁一(千葉県佐原高等学校)	—	30,34~38
6	小沢謙一	5,6,9,12,15,16	—
5	馬場四郎(文部省研修所)	2~4,13	32
5	金子孫市(東京文理大)	19	24,25,27,37
4	青木誠四郎(文部省、東京家政大)	8,11,	20,28
4	大野連太郎(文部省)	15,17	20,33
4	田中正吾(中央教育研究所)	6,11	21,24
4	日下部しげ(東京都桜田小学校)	5,12,13	29
4	山口弥一郎(福島県立会津女子高校)	13	21,28,33
4	高橋礪一(歴史教育者協議会)	—	23,26,37,38

注：創刊号から第38号の『社会科教育』（社会科教育研究社）により作成。論説・実践報告に分類したもののみを対象としている。「所属」の表記は主なものを示した。「執筆号」の「前半」は創刊号から第19号まで、「後半」は第20号から第38号までを意味する。同一号に複数の論説を掲載している場合は、その旨を表記していない。

²² この3名の占領軍関係者は、すべてCIE教育課に所属する女性である。4~7・12・14号に執筆している。

4. 『社会科教育』の特徴と役割 ―仮説として―

戦後初の社会科教育の全国誌であった本誌は、「発刊の辞」にあるように、文部省や占領軍、実験校からの情報を掲載することで、社会科の普及、すなわち戦後の新教育を促進した教育メディアであった。社会科実施（1947年9月）前に発刊された本誌は、情報の送り手からも、情報の受け手からも大いに歓迎されたものと思われる。

本誌は、特定の団体の機関誌ではなかった。他の多くの教育雑誌が、教育団体もしくは大手の教育関係出版社の機関誌的な位置づけであったのと対照的である。本誌のこのような立場は、社会科とは何かが問題となっていた時期には、文部省や中央研究機関、附属学校等で、社会科を作成し、解説し、実験する人々と、読者である教師たちを結びつける要となる役割を果たしやすくしたものであろう。主幹の山崎も単なる公報的な雑誌ではなく、具体的な学校に立脚した特集の設定、執筆者の人選を意識していたものと思われる。

しかしながら、社会科は、本誌の想定を越えて、拡大していくことになる。一つにはコア・カリキュラム連盟を代表とする教育運動があった。当然、他方にはこれに批判的な教育の主張も進められ、この中で社会科は様々な語られ方をする存在になっていった。教師たちが社会科教育という枠のみでは自己の教育活動を捉えられなくなり、ある者はコア・カリキュラム、ある者は地理教育、歴史教育という括りを求めだしたときに、本誌の基盤は、はなはだ曖昧なものになってしまったことは想像に難くない。いわば、〈初期社会科の初期〉を支えた雑誌であった。ただし、逆に見れば、非常に様々な執筆者群像からなる社会科教育論や社会科授業を盛り込む結果となった。歴史教育に関しても興味深い記事が多い。社会科教育および歴史教育が、原点において何を目指したものであったのかを知るための貴重な資料であることも指摘できる。

補注

1. 本誌の所蔵状況

すべてを所蔵している公的機関は、国立教育政策研究所のみで、各大学の図書館等には、部分的に所蔵されている状況である。

2. 本誌記事の復刊の状況

個人の著作集以外では、次のものがある。

- ・『社会科教育史資料 第4巻』（上田薫他編、東京法令、1974年）の中の「初期社会科の理論と検討」「コア・カリキュラム連盟とそれをめぐる論争」
- ・『歴史地理教育』1971年7月臨時増刊号「歴史教育運動の胎動―歴史教育のあゆみ1―」

資料1 社会科教育研究社発行の書籍

班目文雄『社会科の原理と技術』、1947年。海後勝雄『明日の社会科』、1948年。山崎喜与作編『コア・カリキュラムの研究』、1948年。山崎喜与作編『社会科単元指導の実践』、1948年。山崎喜与作編『社会科教材構成と学習指導の実際』、1948年。香川幹一『社会科人文地理概論』、1948年。社会科教育研究社編『社会科の経営概説』、1948年。小沢謙一『アメリカの社会科研究』、1948年。小沢謙一『社会科ユニットの展開』、1948年。新潟大学第二師範学校附属小学校編『教育課程の構成と実践』、1949年。山崎喜与作編『中学校のコア・カリキュラム』、1949年。山崎喜与作『学校生活』(社会科学学習文庫)1949年、[第三単元学校生活の学習書]。社会科教育研究社編『小学校・中学校社会科単元の基底』、1949年。有高巖・内藤智秀共著『世界史の要領:新制高等学校用』、1949年。竹中輝夫・寒川万七『村の子供の社会科:社会科の学び方 学ばせ方』、1950年。

注:国会図書館および各大学図書館の蔵書検索による。なお、本誌広告では以下の書籍も掲載されている。

石木誠一『図で説く世界史』。石木誠一『世界史年表』。山崎喜与作編『社会科学習日本地図(三枚一組)』。山崎喜与作『社会科の学習(中学一年用前編)』[中学一年第一・第二単元の学習書]。山崎喜与作『田舎の生活』(社会科学習文庫)[予告のみ]。

資料2 発刊の辞

「発刊の辞 山崎喜与作

憲法の改正に伴ない、これに準拠して新に教育基本法が制定せられ、わが国の教育に画期的な大改革が断行される事になりました。しかして学校教育に於ても義務教育年限の延長、教科課目の変更、教授方法の改革等、新日本の建設にふさわしい転換が行われようとしていることは、誠によるこぼしい事と思われます。これらのいろいろの改善の中、日常教育上最も著しいものは、六・三・三制の実施と、小学校・中学校に於ける社会科の設置とであろうと思ひます。在来の公民・地理・歴史の三科目は、新に社会科に発展解消することになりましたが、単に三科目の合科というのみでなく、現在も将来も社会人として必要な知識を、児童・生徒自らの力で獲得させようとするもので、専ら彼等の学習能力の養成に主力を注ぐかのようにも聞いて居ります。何れ、我が国教育界に初めての試みでありますので、その教育には幾多の問題があろうと考えられます。

四月より実施される予定の社会科は、教科書が遅れ、教師用書すら間に合わないところから第二学期より実施されることになりましたが、東京とその附近では文部省や民間の諸研究所と連絡もつき、或程度独自の研究や実験も行われていても、地方の中学校や小学校へは普及が困難な事情にあるものと考えられ、実施後に於ても、短期間

に作り上げられた社会科でありますからその性格に於て、教材に於て、取扱い方に於て幾多の解決すべき問題が生ずることと思われます。

本誌は、こうした社会科について、初めは先ず、文部省で企画された事や中央の諸研究機関で研究された事を一般に広く報告し、その宣伝を援助すると共に、読者層と見做される教育者・父兄の質疑に答え、これが大体行われた暁は、地方研究家の論文や意見を紹介して、社会科をよりよきものに練りきたえて行きたいと思うところからその発刊を企図したものであります。

読者各位は、以上の趣意を考えにおかれ、本誌を通じて、社会科の正しき発達のため、文化日本建設のために御利用・御援助を賜わらんことを切望する次第であります。終りに臨み、本誌刊行にあたり、絶大なる援助を賜りました原安三郎氏並びに文部省社会科監修官各位に深く謝意を表するものであります。」

注：『社会科教育』創刊号、1947年5月。「原安三郎」は日本化薬株式会社の社長である。佐藤氏によれば、山崎は隣組であった原に出資を依頼したとのことである。

資料3 社会科教育協会の編集委員への編集委託

「謹告

社会科創始以来二年有半、当局並びに実際教育者の真摯なる研究や宣伝によつて、漸次健全な発達をたどり、昨今では、地域単位 of 社会科カリキュラムが構成されるようになりましたことは、誠によるこびにたえないところであります。一時いろいろな教育思想にまどわされ、社会科に危惧の念をもつ人々もあつたように思われますが、わが国の社会科が戦後新教育にとり上げられた必須科目の一である以上、たえざる研究がつかまれ、その実績を顕現するように努力しなければならないものと存じます。

とかく、これまでの社会科教育の理論は、教育学者によつてのみ唱えられ、抽象的に傾いて、実際とはかけ離れた点が少なくなつたと考えられます。社会科初期の、いわゆる入門時代は終つたこれからは、過去を反省し、落ちついて、その内容と方法とについて研究を重ね、再出発をなすべきでありましよう。

われわれは、社会科に関連ある諸科学者を中心とし、各地の実際教育者と共に社会科教育の研究団体を組織し、単に教育の方法論に止まらず、教材内容を検討してその取扱いについて具体的にほりさげていきたいと思うものであります。

雑誌「社会科教育」は、過去三ヶ年、学者諸先生、執筆者、読者各位の御援助、御協力により、初期の開拓に微力をささげ得たことを喜び、深く感謝するものであります。今回第三十号より、新進気鋭の少壮学者により成る社会科教育協会の編集委員にその編集を委託することにいたしました。今後は更に画期的な内容を充実して各位の御期待にそい得るように努力したいと存じます。将来共引きつづき御愛読の上、御批判下さる様お願い申し上げます。

社会科教育研究社

注：『社会科教育』第30号、1950年5月、51頁。

社会科教育研究社版『社会科教育』総目次

凡例

- ・論説・記事名、執筆者名（所属、肩書き等）、掲載頁の順に記載した。
- ・明らかな誤植は正したが、表記は基本的に原文のままである。
- ・論説・記事名の記載順は目次での記載を基本とし、目次に記載がない小さな記事等は編集後記の前に記載した。
- ・頁の記載のない部分の記事は掲載頁を記載していない。
- ・総目次作成者による補足、振り仮名等は〔 〕で記入した。

創刊号 1947（昭和22）年5月1日発行

発刊の辞、山崎喜与作

巻頭言 社会科の出発に際して、勝田守一（文部事務官）、1～2

新しい社会科の構想、海後勝雄（中央教育研究所員）、3～5・22

社会科の研究問題、重松鷹泰（文部事務官）、6～12

地理科から社会科へ、尾崎帛四郎（文部事務官）、13～16

歴史と社会科、塩田嵩（文部省教科書局第一編集課）、17～22

社会科に関する諸考察、上田薫（文部省事務官）、23～27

わが国の食糧問題に就いて、山崎喜与作、28～34

時事問題の解説

修身倫理と地理歴史に関する合衆国教育使節団の報告書、35～37・34 教育基本法の制定、
（山崎記）、38～39 新国立公園伊勢志摩の指定について、（山崎記）、39～40 住宅払底
と補給策、40

表紙絵の解説、27

編輯後記

第2号 特輯 小学校の社会科 1947（昭和22）年6月1日発行

巻頭言 社会科の教師、山崎喜与作、1

社会科に就いて—特に中学校を対象として—、勝田守一（文部事務官）、2～6

社会科構成の原理、飯島篤信（中央教育研究所員）、7～11

公民教育から社会科教育へ、馬場四郎（文部省事務官）、12～15

社会科教育の実験結果、尾崎帛四郎（文部事務官）、30～32

社会科指導の基盤、重松鷹泰（文部省事務官）、33～35・6

政治地理から見た日本の現状、山崎喜与作、36～38

社会科の学習指導計画案、東京第二師範男子部附属小学校（執筆責任者小山昌一）（文部省教科書局社会科室尾崎記）、16～29・17・26

学校教育法、18～24

連合軍の日本占領政策、39～40・27～29

時事問題

相模ダムの完成、11 砂糖もろこし、15 航空路とバス路、38

社会科実施について 昭和22年4月22日〔文部省の通達〕、25～26

興味と好奇心、（山）、29

表紙・カツトの解説、（山崎）、32

編輯後記

第3号 特輯 中学校の社会科 1947(昭和22)年7月1日発行

巻頭言 社会科指導の心構えについて、海後勝雄(本誌編輯同人、中央教育研究所員)、1
中学校の社会科、保柳睦美(文部省事務官)、2~4

郷土社会と社会科、矢口新、5~9

社会科指導の基盤(つづき)、重松鷹泰(文部省事務官)、10~12

社会科の授業報告ー準備・導入・計画ー、班目文雄(高等師範学校教諭)、13~16

中学社会科実験の反省と本年度の企画、徳山正人(東京女子高等師範学校教諭)、17~19

中学校に於ける社会科経営のあり方、村本精一(埼玉県川口市立西中学校長 川口市新教育研究会委員長)、20~22

社会科の実験報告ー特に一年の場合ー、片岡龍一(東京都港区立桜田小学校)、23~29

カリフォルニアに於ける小学校社会科教育案、30~33

社会科に関する最近の諸論稿ーその紹介と短評ー、馬場四郎(教育研修所員)、34~35・33

暫定地理書の取扱と掛図について、尾崎帛四郎、27

中等社会科教員の声を聴くー教育研究全国協議大会に列席してー、真道永次(中教編集部員)、36~37

社会科教育に関する一考察、古海基(糸魚川中学校教諭)、37・39・40

児童の関心事項の発見、牧田利平(新潟第二師範付属校)、38~39

学校教育法(つづき)、40

表紙・カットの解説、山崎喜与作、16

中学一年第一単元 日本列島はわれわれに、どんな生活の舞台を与えているか、9・19

編輯後記

第4号 特輯 学習研究号 1947(昭和22)年8月1日発行

巻頭言 社会科の指導開始に当つて、尾崎帛四郎、1

社会科と生徒の発達、ルアンナ・J・ボウルズ(連合軍総司令部教育局中等・高等教育係官)、2~3

作業単元の立て方について、重松鷹泰(文部事務官)、4~5・34

社会科における歴史学習の一面、塩田嵩(文部事務官)、6~9・3

社会科作業単元の構成、村上莞爾(成蹊学園教授)、10~16

社会科経営の実際、和泉久雄(館山市北条小学校長)、17~20・23

社会科に関する最近の諸論稿ーその紹介と短評ー、馬場四郎(教育研修所員)、21~23

社会科の実践、堂馬重一(大阪第一師範男子部附属小学校)、24~26・23

社会科の講座 第一講 社会科とは何かーその地位と任務ー、倉沢剛(中央教育研究所員)、27~30

資料 社会科から見た日本農業、真道永次(中等学校教科書会社編輯員)、31~34

中学二・三年社会科第一単元〔学習指導要領〕、35~36

表紙・カットの解説、(山崎記)、34

編輯後記

第5号 特輯 単元の取扱 1947(昭和22)年9月1日

巻頭言 社会の実施、山崎喜与作、1

コミュニティースクール（郷土社会の学校）、ヘレン・ヘファナン（司令部民間情報教育局初等教育担当官）、2～4
社会の指導とことば、林伝次（教科書局第一編修課長）、5～6・11
社会科に於ける学習活動の構成、矢口新（中央教育研究所員）、7～11
社会科問答、小沢謙一・山崎喜与作、12～16
作業単元の指導計画案、樋口澄雄（桜田小学校）、17～18
二年の学習指導計画、片岡竜一（桜田小学校）、18～21
三年の学習指導計画、日下部しげ（桜田小学校）、21～22
六年の学習指導計画、室井光義（桜田小学校）、22～24
社会科講座 第二講 社会科の成立と本質、倉沢剛（中央教育研究所員）、25～29
社会科指導の糧、永栄啓利（和歌山県視学嘱託）、30～31
社会科に対する一考察、波浮薫（会社員）、31～32
学校教育法（つづき）、16・24・29
表紙絵・一頁のカットの解説、（山崎）、11
編輯後記

第6号 特輯 学習効果判定号 1947（昭和22）年10月1日

巻頭言 効果判定と人間観、海後勝雄、1
民主主義と教師の自由主義教育、ヘレン・ヘファナン（司令部民間情報教育局初等教育担当官）、2～3
中学校の国史について、宮下三七男（文部事務官）、13～14・24
効果判定
社会科に於ける効果判定の本質、上田薫（文部事務官）、4～7
社会科に於ける学習効果の評定、田中正吾（中央教育研究所員）、8～12・3
社会科の学習における効果測定構成の構成、水間大吉（信濃教育会教育研究所）、25～28、24
社会科のユニットの研究、小沢謙一、15～20・24
社会科指導における環境の構成、山下正雄（東京第一師範女子部附属小学校教諭）、21～24
社会科の講座 第三講 社会科の目標、倉沢剛（中央教育研究所員）、29～32
編集後記

第7号 特輯 教科書研究号 1947（昭和22）年11月1日

巻頭言 教科書と教育専門家、海後勝雄、1
小学校に於ける美術教育、ヘレン・ヘファナン（連合軍総司令部教育局）、2～4
社会科の指導と絵画、山崎喜与作、26～27・11
教科書研究
小学校社会科新教科書について—特に「土地と人間」を中心として—、尾崎庸四郎（東京第一師範教授）、5～7・4
アメリカの社会科教科書、飯島篤信（中央研究所員）、8～11
参考書としての社会科教科書—社会科教科書を読んで—、矢口新（中央教育研究所員）、16～19
「私たちの生活」を手にして、八木三郎（東京第二師範男子部附属小学校教諭）、20～21
「土地と人間」を手にして、村上莞爾（成蹊学園）、22・21
社会科教科書について、和泉久雄（千葉県館山市北条小学校長）、23

中学社会科教科書、班目文雄（東京高等師範学校教諭）、24～25
社会科の指導と反省、杉山穰（成蹊学園教諭）、12～15
社会科講座 第四講 社会科の内容構成の理論、倉沢剛（中央教育研究所員）、28～32
「時の話題」の紹介、編集部、4
表紙絵、25
第一回社会科研究発表討論会予定案、主催社会科教育研究社、32
編集後記

第8号 特輯 児童研究号 1947（昭和22）年12月1日

巻頭言 児童研究の一方途、尾崎庸四郎、1

児童研究

児童研究と社会科の指導、青木誠四郎（文部省教材研究課長）、2～4・7
子供達に進攻性を発揮する機会を与えよ、ドロシイ・W・バルッチ、5～7
実態調査の活用、村上莞爾（成蹊学園）、12～16
生活調査と学習活動の関係、班目文雄（東京高等師範学校教諭）、17～18
作業単元について、上田薫（文部事務官）、8～11
社会科教育を育てる者の態度、小山昌一（東京第二師範附属小学校）、19、32
低学年単元の取扱い、岡本米子（館山市北条小学校教諭）、20～21・25
社会科こぼればなし①、泉二郎、22
社会科「人文地理」のあり方—現行教科書の批判—、真道永次（中教編集部）、23～24
第一回全国社会科研究発表討論会案内、25
川口氏社会科の全国研究集会における討議、編集部、26～27
質疑応答 社会科のユニットとは何か、28
社会科講座 第五講 社会科の学習内容はどのようにして構成するか、倉沢剛（中央教育研究所員）、29～32
新著紹介—社会科ものがたり—、11
表紙絵解説、18
講習会予定案内
編集後記

第9号 特輯 教材構成号 1948（昭和23）年1月1日

巻頭言 教材構成は手近の面から、山崎喜与作、1

教材構成

社会科教材構成論、海後勝雄（中央教育研究所）、2～6・8
低学年児童の社会意識はどのように発達するか、小沢謙一、9～12
社会科単元学習の構成、小暮強（東京第三師範学校附属小学校）、17～23
社会科の講座 第六講 社会調査の方法（一）、倉沢剛（中央教育研究所員）、29～32
今日の子供、ビオラ・M・バーナード博士、7～8
社会科の発足状況について、重松鷹泰（文部事務官）、13～16・24
生活調査と学習活動の関係（二）、班目文雄（高等師範学校教諭）、25・32
社会科こぼればなし②、泉二郎、24
中学校・高等学校社会科と職業科、松井五郎（東京攻玉社商業学校教諭）、26
一般社会科と職業科、佐藤久治（秋田師範学校教諭）、27

全国社会科研究発表討論会の記、山崎喜与作、28・26
新著紹介 三沢勝衛著・河角広編 風土産業、尾崎庸四郎、12
編集後記

第10号 特輯 家庭連絡号 1948(昭和23)年3月1日

巻頭言 カリキュラム主義への反省、海後勝雄

花園には花を一新教科課程と社会科一、坂元彦太郎(文部省初等教育課長)、1~4

社会科は前進すべきか、後退すべきか、梅根悟(東京文理科大助教授)、5~8

社会科の家庭通信と学籍簿、井坂行男(文部事務官)、9~12・18

座談会 学籍簿と家庭連絡、13~18

出席者 井坂行男(文部事務官)、阿部元(神田千桜小学校)、梅沢実(本所緑小学校)、海後勝雄(司会者)

社会科の指導と反省(二)、杉山穰(成蹊学園教諭)、19~22

社会科学習指導案の修正について(一)、小山昌一(東京第二師範男子部附属小学校)、24~26

「社会的人間」としての自覚、横田章臣(愛媛県越智郡万乃中学校長)、28

郷土の学校経営寸報、鈴木和夫(千葉県山武郡福岡中学校)、28

最近のソヴィエツト教育の動向、ヂョージ・S・カウツ(コロンビア大学教育学部)、29~32

社会科随想、石本正隆(徳島県石井中学校)、4

◎アメリカの社会科はどのような効果を判定するか、22

嬬と前代社会教育の反省、江川肇男(民間伝承の会会員)、22

書評、23・26

馬場四郎「社会科の本質」同学社、中央教育研究所編「社会科概論」金子書房、梅根悟「新教育への道」誠文堂新光社

波、27

編集後記

第11号 特輯 学習動機と興味 1948(昭和23)年4月1日

巻頭言 学習指導案と子供の興味、山崎喜与作

地域社会と社会科、石山脩平、1~3・7・20

学習動機と興味

子供の興味の発達、沢田慶輔(東京第三師範教授)、4~7

単元構成における興味の問題、青木誠四郎(文部省教材編集課長)、8~11

学習の動機づけ、田中正吾(中央教育研究所員)、12~15

社会科と興味—実践記録—

社会科における興味の展開、大橋富貴子(東京女高師教諭)、16~17

興味と単元への導入、前原忠吉(川口市立西中学校教諭)、17~19

低学年の子どもの興味と学習活動、藤原一雄(東京都文京区窪町小学校教諭)、19~20

学校見聞記 十日町・小出・六日町、小沢謙一、22~23

福井市と金沢市、巨田元尚(福井県坂井郡芦原小学校)、21

社会科の素地と背景、田中稔(呉市東畑中学教諭)、21

波、24~25

好きこそ物の上手なれ、(謙)、11

子供の理解、11

社会科の講座 第七講 社会調査の方法 (二)、倉沢剛 (中央教育研究所員)、26~28
中学校生徒の個人的・社会的適応、アルバ・W・グラハム、29~32
社会科教育全国協議会案内 主催 社会科教育連盟、24~25
生活の芸術化、(喜)、32
編集後記

第12号 特輯 劇的表現 1948 (昭和23) 年5月1日

巻頭言 学習活動の指導、山崎喜与作

教育に於ける表現活動、海後宗臣 (東京大学教授)、1~5

社会科における劇表現の位置、ポウリン・ヤイディ女史 (総司令部教育局初等教育担当官)、4~6

アメリカに於ける表現活動—社会科に於ける表現学習—、倉沢剛(中央教育研究所員)、7~10

社会科とよき思考、小沢謙一、11~14

人形劇の構想と表現、木口嘉津男 (人形劇くるみ座員・東京青柳小学校教諭)、15~17

社会科学習における紙芝居構成について、武藤重治 (東京第一男子附小教諭)、18~22

社会科作業単元「宿場」の劇化、日下部しげ (東京都港区桜田小学校教諭)、22~24・6

社会科学習指導案の修正について (二)、小山昌一 (東京第二師範男子部附属小学校教諭)、28~32

問題の学校、神田淡路、26~27

書評

豊沢登著「アメリカの社会科」〔国民教育社〕・「アメリカにおける社会科教育の研究」〔理想社〕、25

編集後記

第13号 特輯 集団活動 1948 (昭和23) 年6月1日

巻頭言 集団活動、山崎喜与作

学習の社会化、馬場四郎 (文部省研修所員)、1~3・28

児童集団の教育的性格、長島貞夫 (東京文理大助教授)、4~9

児童学習集団の二類型、海後勝雄 (中央教育研究所員)、8~11・20

実践報告

一年生をグループ活動に導くまで、日下部しげ (港区桜田小学校教諭)、11~13

五六年グループ活動の実際指導、宮地忠雄 (東京女高師教授)、13~15

分団学習と遅進児(七年生について)、松沢光雄(東京都新宿区四谷第一中学校教諭)、15~20

グループについて、石木誠一 (東京都立石神井中学校教諭)、28

第一学年作業単元展開具体案、両角達爾 (東京第二師範男子部附属教諭)、21~24

社会科と資料蒐集と整理、山口弥一郎 (福島県立会津高女教員)、26~27

八学会第一回連合大会、班目文雄、19~20

社会科教育連盟主催の社会科全国協議会を観るの記、(山崎記)、29

書評

海後勝雄著 明日の社会科、倉沢剛、25

小沢謙一著 アメリカの社会科研究、海後勝雄、25・28

資料 郷土社会史の断片—市としての愛知川—、池田美雅 (滋賀県愛知川高女教諭・日本地理学会員)、30

融合課程を目指す社会科取扱上の問題、富岡佐太男（茨城県多賀町河原子小学校）、31～32
編集後記

第14号 特輯 手による表現 1948（昭和23）年9月1日

巻頭言 教育の民主化、山崎喜与作（主幹）、1
作業単元の構成、長坂端午（文部省事務官）、2～7
社会科に於ける問題解決法〔プロブレム、ソルヴィング〕、ポーリン・ヤイディ（総司令部教育局初等教育担当官）、6～8
問題・基底・作業単元、上田薫（文部省事務官）、9～12
社会科と工作、樋口澄雄（東京都港区桜田小学校）、13～15
社会科における絵画表現、桜福之助（東京第二師範男子部附属小学校）、16～18
社会科と地図・模型・グラフの表現、山崎喜与作、19～21
社会科に於ける地図・統計・図表指導の一参考、函館社会科教育懇話会、22
窓、中坂登、23
世相、(稲谷)、23
教育記者座談会（社会科を中心として）、24～25
出席者 小沢謙一・海後勝雄・古川原（新しい教室）・皆川正治（明日の学校）・池田種生（教育ペン）・小野金之助（民主教育）、司会 山崎喜与作
第二回全国社会科研究発表討議会案内、26～27
教育委員会の成立について、山崎喜与作、27
社会科と作業単元の設定、上条為人（長野師範学校女子部附属小学校）、29～32
社会科学習指導計画ができるまで、田中久直（新潟県三条市裏館小学校）、28
教育ニュース、(USIS)、28
編集後記

第15号 特輯 コア・カリキュラム 1948（昭和23）年10月1日

巻頭言 新教育の方向、山崎喜与作、1
コア・カリキュラム論、海後勝雄（中央教育研究所員）、2～6
アメリカにおけるカリキュラムの変遷（一）、小沢謙一、7～10
社会科における地域性の限界、上田薫（文部省事務官）、11～14・21
座談会 コア・カリキュラムについて、15～20
司会者 海後勝雄、出席者 和泉久雄（千葉県北条小学校）・小沢謙一（社会科教育編集顧問）・風間清（新潟一師男子部附属）・倉沢剛（中央教育研究所員）・樋口澄雄（東京桜田小学校）・山田真（神奈川県師範女子部附属）
地方に於ける社会科教育の諸問題をひろつて、大野連太郎（文部省事務官）、22～23
コア・カリキュラムの道程を探る、中坂登、24～25
書評
倉沢剛著「社会科の基本問題」〔誠文堂新光社〕・「社会科の学習形態」〔青雲書院〕、28
全国社会科研究協議会案内、26～27
教育ニュース、26～27
新制中学〔ジュニア・ハイスクール〕の個性調査、パーシバル・M・シモンズ、マレー・シヤーマン、29～32
〔短歌〕、稲谷、23

窓、稲村、32
編集後記

第16号 特輯 史的教材取扱 1948 (昭和23)年12月1日

巻頭言 子供の成長、山崎喜与作、1

社会科における民俗の理解、和歌森太郎 (東京文理科大学助教授)、2~6

社会科と歴史教育、鈴木朝英 (文部省教育研修所)、5~8

社会科をまもるもの、高橋碩一 (教科書編集委員)、9~11・19

子供の歴史的関心の一考察、丹治守雄 (東京氷川小学校)、12~16

東洋史指導の試み、佐野正則 (中教編集部)、17~19

中学校社会科国史単元の取扱、横田章臣 (愛媛県万乃中学校)、20~21

アメリカにおけるカリキュラムの変遷 (二)、小沢謙一、22~25

学校見聞記一香川県下の社会科一、班目文雄、26~27・25

五年の社会科、寺尾茂 (高田師範附属小学校)、28

新制中学 [ジュニア・ハイスクール] の個性調査 [「学校評論」より転載]、パーシバル・M・シモンズ、マレー・シヤーマン、29~32

我国教育施設の現況、32

編集後記

第17号 特輯 地理的展開 1949 (昭和24)年1月1日

巻頭言 調査の必要、山崎喜与作、1

社会科に於ける地理的理解—衣食住資材生産を例として—、浅香幸雄 (東京高等師範学校教授)、2~5

社会科単元の地理的展開と能力、山崎喜与作、6~8

社会科に含まれる地理的内容、尾崎虎四郎 (東京第一師範教授)、9~11

イギリスの社会科、班目文雄 (東京高師研究員)、12~14

三四年の社会科教科書について、大野連太郎 (文部省事務官)、15~17

学校見聞記、福島県の社会科、長坂端午 (文部省事務官)、18・21

グループ学習をどのように指導していつたか、斎藤淳子 (福島県西白河郡川崎小学校教諭)、19~21

奈良明石参観随想、稲谷、22~24

児童の経験領域の調査、武藤重治 (東京第一師範男子部附属小学校)、25~26

児童の地理的関心の調査、隠岐忠 (松本市田川小学校教諭)、27~30

アメリカの公立図書館に於ける児童のお話の時間 [1948年5月号「学校と生活」]、ノラ・E・ボイスト (学校および児童図書館の専門家)、31~32

編集後記

第18号 特輯 農村社会科 1949 (昭和24)年2月1日

巻頭言 農村の民主化、山崎喜与作、1

農村児童の社会意識、牛島義友 (東京女子高等師範学校教授)、2~4

生活する社会学習、矢口新 (中央教育研究所員)、5~8

農村社会科の諸問題、山崎喜与作、9~12

カリキュラム構成と農村社会科、宇佐美安雄 (神奈川県福沢小学校)、13~15、21

国史教育の反省、有高巖（東京女高師講師 文学博士）、16～19
農業生産地に於ける社会科カリキュラム構成の基盤、菊地武太（岩手県胆沢郡白山中学校）、20～21
地域の人々とどう協力して社会科を進めたか、埼玉県三保谷小中学校（小高一郎記）、22～24、33
近眼的な、あまりに近眼的な—山谷進介氏（カリキュラム一・二号）に答う—、上田薫、25～27
北海道の農村に於ける社会科、築山正次（北海道上小郡比布中学校）、28～29
教育ニュース、30
◎教員実態調査成る、◎“怠慢な校長” 軍政部から御目玉、◎教育公債とは苦しいが、
◎国立教育研究所案今春早々国会へ提出、◎週五日制は是非か、◎こんな先生がいる
社会科指導のこつ、31～33
四年の指導について、山本甫十（築地文海小学校） 指導雑感、河野弘之（江戸川区東川）
一つのころみ、岸本清（岡山市山陽女子高校）
社会科研究会便り、34～35
社会科同好会について、田中吉男（岩手県胆沢郡水沢中学校教諭・郡社会科同好会副会長）
〔無題：各地の社会科研究会〕、（社会科教育社編集部）
全国の「社会科研究団体」にお願い、社会科教育研究社
社会科見聞記 静岡第二師範（浜松）附属中学校参観記、（稲谷生）、36
社会情勢と教育の目標 [「学校と教育」1948年7月3日から転載]、E・V・セーヤース（ハワイ教育大学名誉教授）、37～40
新教育は堅実に進めよ、（早川）、8
編集後記

第19号 特輯 特別活動 1949（昭和24）年3月1日

巻頭言 教育の自主性、山崎喜与作、1
新教育と生活指導、三木安正（文部視学官）、2～7
特殊教科活動の構想、石川二郎（文部事務官）、8～12
少年協議会の活動、石橋勝治（四谷第六小学校）、13～18
特別課程の指導、滝沢俊郎（東京都立第一高等学校教諭）、19～22
六三地域の醇化、矢部門三（横浜市立老松中学校長）、22～23、12
ホーム・ルーム制の実践、藤田喜一（札幌一条中学校教諭）、23～24
社会科と青少年赤十字、高田平一（東京赤坂中学校）、25
良い仲間 [「シニア・スコラスティック」1948年3月8日号より]、26～27
アメリカに於ける視力保護学級 [「ハイジニア」誌1948年7月号より]、27～28
農村の地域性を生かす単元の取扱い（中学一年）、佐藤正義（福島県湯野中学校）、28～31
社会科見聞記—福沢村母子常会記—、（山崎）、32～33
岩手県下の社会科、班目文雄（東京高師研究室）、34～35
漁村異変、（山崎）、36
アメリカのホームルーム、金子孫市（東京文理大助手）、37～40
（教育ニュース）◎生徒に火傷させる、18
（ニュースより）◎中学校の長欠
地域の調査と態度、（稲谷）、31

編集後記

第20号 特輯 カリキュラム 1949 (昭和24) 年5月1日

巻頭言 カリキュラムの範囲、山崎喜与作、1

カリキュラム構成についての諸問題、青木誠四郎、2~4

コア・カリキュラムと社会科、山田栄 (東京文教大学教授)、5~8

生活カリキュラムの全体構造、海後勝雄、9~14・23

社会科学学習指導法研究上の諸問題、長坂端午 (文部事務官)、15~18

単元の指導

一年一学期単元「私たちの学校」指業案、神奈川県川崎市宮前小学校、17~19

四年一学期単元「生活の工夫」「横浜の今と昔」指業案、神奈川県範女子部附属小学校、19~21

六年単元「交易」の展開、松本市田川小学校 隠岐忠、24~27

中学一年一学期単元「新しい生活の目あて」指導案、奈良県基底、22~23

書評

海後宗臣著「教育の社会基底」〔河出書房〕、中坂登、28

紹介 地方の社会科研究、(山崎)、29

「社会科教育に於ける科学性の問題」について、横戸寧 (民主主義科学者協議会会員)、30~32

わが校のスコープ、横浜市石川小学校、33~35

社会科見聞記 福岡神興小学校カリキュラム集会に参加して、大野連太郎(文部事務官)、36~37

教育ニュース、38

彼等の学ぶ権利 [「ハイジイア」1948年5月号]、エブ・ホール・ロウ (イリノイ州児童病院学校)、39~40

第三回全国社会科教育協議会・全国社会科教育協議会予告、20~21

生徒と先生の社会科観、32

最近の犯罪情況 (防犯展より)、35

産業革命を招来した大発明 (発明展より)、40

編集後記

第21号 特輯 学習能力 1949 (昭和24) 年6月1日

巻頭言 子供の生活とその発展、(山崎)、1

情操的発達とカリキュラム、沢田慶輔、2~5

新なる児童調査のために、田中正吾、6~9

「しごと」の発展する契機、倉富崇人、9~12

ドラマチックプレー (劇的活動) についての一調査、日浦儀一郎 (新潟第一師範学校男子部附属小学校)、12~16

遊びとカリキュラム、橋本正司 (福島県郡山市立金透小学校)、17~20

グループ活動について、小山昌一 (東京第二師範学校男子部附属小学校)、21~23

書評

山田栄著 新カリキュラム [教育文化出版社]、金子孫市、25

単元の指導

二年単元「お店」指導案、兵庫県加古川小学校、26~27

三年単元「私たちの町」、大阪市小学校教育研究会、27～28

五年単元「現代の交通・運輸」指導案、染田屋謙相（東京第三師範附属小学校）、30～33・

30

第九学年単元指導案「わが国の経済を復興するにはどうしたらよいか」、群馬県師範女子部
附属中学校、29～30

社会調査の実践（達南プランの概要）、福島県伊達郡川俣小学校、33～37

伝承と農村生活—社会科教育に対する一私見—、山口弥一郎（福島県立会津女子高等学校）、
36～38・37

情緒的成熟の発展、ルイス・ピー・ソープ（南加州大学教育学並心理学教授・哲学博士）、
39～40・27

How と Why、5

第三回全国社会科教育協議会、20

第三回全国社会科教育協議会趣意・全国社会科教育協議会、24

編集後記

第22号 特輯 特殊児童と社会科 1949（昭和24）年7月1日

口絵 半盲児童教授

巻頭言 教育の民主化と特殊児童、山崎喜与作、1

精神薄弱の病理、上野陽三（慶応大学医学部講師）、2～4

精神薄弱児の心理、外林大作（東京第一師範講師）、5～7

精神遅滞児の教育、三木安正（文部視学官）、8～13

我が校の養護学級に於ける社会科指導の概要、秋田県五城目小学校、14～16

中学校に於ける特殊生と社会科指導—特殊教育の小さき体験を通して—、中村与一、17～
20・16

身体不自由生の教育、星一雄（東京都九段高等学校長）、21～23・20

単元指導 四年単元「むさし野」指導案、東京桜田小学校、24～27

特殊学校に於ける社会科の動向、山崎巳代治（神奈川師範女子部附属小学校教諭）、28～34

グループ活動について（続）、小山昌一（東京第二師範学校男子部附属小学校）、35～36・34

話し合い指導の出発点、長野県堀金小学校（上兼宗二）、37～39・42

教師とハンディキャップをもった児童 [Education1949年1月号より]、レオ・エフ・ケイ
ン（サンフランシスコ州立大学教育学教授異常児指導計画係・哲学博士）、40～42

書評

小沢謙一著 母のための社会科 [日本学芸社]、山崎喜与作、43

鐘の音、(鳴海)、44

小学校・中学校用の日本史の参考書について、まつしま・えいいち（東大史料編纂所所員）、
45～48

口絵解説 半盲児童教授、48

編集後記

第23号 特輯 コア・カリキュラム批判 1949（昭和24）年8月1日

口絵 オーストラリアの麻疹療養所

巻頭言 生活教育の科学性、1

特に小学校における「コア・カリキュラム」という名称について—その誤用の功罪—、坂元

彦太郎（文部省職業課長）、2～8
 コア・カリキュラムに関する二三の私見、森昭（大阪大学講師）、9～13・8
 カリキュラム研究の現段階と課題ーコア・カリキュラムの位置づけー、矢口新（中央教育研究所員）、14～18
 コア・カリキュラム運動の前提ーその主唱者の実証的科学的根拠をただすー、石川二郎（文部事務官）、19～24
 曲学阿世の教育術、矢川徳光（民主主義科学者協議会会員）、25～27
 新カリキュラム実施の反省、重松鷹泰、28～32
 六年単元「健康で安全な福島市」指導案、大西栄（福島師範男子部附属小学校）、32～35
 コア・カリキュラムによる実践と反省、清水一郎（兵庫師範学校女子部附属小学校）、36～38
 教育ニュース 歴史教育者協議会の発足、(S)、38
 歴史教育の基本問題ー社会科歴史の新出発によせて、たかはし・しんいち、39～41
 鐘の音、(鳴海)、42
 社会科見聞記 秋田に於ける第三回研究協議会雑感、(山崎)、43
 アメリカ便り、大野連太郎、44
 書評寸評、谷村早苗、44
 オーストリア率先して、麻疹性児童の為に医療と教育とを結付けた施設を開く、C・C・D・ブラモール、45～47
 病的劣等感ーその真因ー〔Education1949年1月号より〕、バーニイ・キャッツ（カリフォルニア・ロサンジェルス実験心理学者・哲学博士）、47～48
 口絵解説 オーストラリアの麻疹療養所、47
 編集後記

第24号 特輯 単元学習 1949（昭和24）年9月1日

口絵 東京のアメリカンスクール
 巻頭言 単元の展開、(山崎)、1
 生活単元学習と教科学習、海後宗臣（東大教授）、2～6
 生活教育と単元学習、田中正吾（中央教育研究所員）、7～10
 社会科の単元展開についてー指導上の一助言ー、上田薫（文部事務官）、11～14
 学級経営と単元学習、金子孫市（東京文理大助手）、15～18
 単元展開プラン
 一年生の作業単元の展開〔「おみせや」「私達の近所」〕、山崎巳代治（神奈川師範女子部附属小学校）、19～21
 二年生の作業単元の展開「いなかと東京」、片岡龍一（東京桜田小学校）、22～24
 五年単元「健康な生活」の指導計画、竹沢正次（新潟県高田附属小学校）、25～28
 六年単元「農業協同組合」指導案、岩手県河東郡基底、29～32
 中学三年単元「よりよい消費生活を営むにはどうすればよいか」指導案、古関富男（福島師範附属中学校）、32～35
 社会科実践の課題とその解決、矢内庸克（宮城師範男子部附属小学校）、36～38
 生徒の関心と社会科の学習指導ー男女共学学級指導のためにー、田中清三郎（広島女高師附属中学校）、39～40
 鐘の音、(鳴海)、41
 歴史教育の展開、菅野二郎（文京高校教諭）、42～44

不健全なる親の態度と子どもの行状、レオ・カナー(児童心理療法部部长・医学博士)、45~48
編集後記

第25号 特輯 学校図書館と社会科 1949(昭和24)年10月1日

口絵 アメリカの図書館

巻頭言 生活教育と文献研究、山崎喜与作、1

新しい教育に於ける学校図書館、深川恒喜(文部事務官)、2~5

社会科学学習と読書指導、滑川道夫、6~9

学校図書館と社会科の経営—東京第一師範附属小学校の場合—、小堤勝郎、10~13

社会科学学習と学校図書館—小学校の場合—、松尾弥太郎(東京都緑ヶ丘小学校教諭)、14~16

学校図書館の教育的意義—中学校の場合—、佐野友彦(東京都梅ヶ丘中学校教諭)、17~19

社会科の学習と学校図書館—高等学校の場合—、田中保(千葉県立船橋高等学校教諭)、20~22

社会科学学習指導の方法と社会科バス、小原憲三郎(福島県郡山市第一中学校)、23

カリキュラムへの哲学的反省—森昭氏の「私見」をめぐって—、海後勝男、24~26

コア・カリキュラム批判について—坂元彦太郎氏の「コアの名称の誤用の功罪」を読んで—、金子孫市、27~30

具体性の貧困ということについて—コア・カリキュラム論と地域性の問題—、上田薫、31~36

世界史の構想、友田行夫、37~40

中学二年単元指導「資源とその利用」、岩手県胆沢郡基底、41~44

研究会の活動状況の報告、佐藤久平(山形県東村山郡天童小学校)、44

鐘の音 平和教育と暴力の否定、(鳴海)、45

教育実践家の研究として「ワークショップ」の研究方法をすすめたい、星一雄(九段高等学校長)、46~47

教育ニュース、47

一筆啓上、47

歴史家の書いた郷土の読み物、尾崎厩四郎、48

アメリカに於ける図書館活動、48

編集後記

第26号 特輯 現場学習 1949(昭和24)年11月1日

口絵

巻頭言 視覚教育と現場学習、(山崎)、1

地域社会学校と現場学習、海後勝雄、2~5

現場学習のねらい—とくに学習形態としての現場学習—、倉沢剛、6~8

社会科と現場学習、小暮強(東京第三師範附属小学校教諭)、9~13

現場学習の契機、室井光義、14~16

現場学習の着眼点とその整理、前原忠吉(川口西中学校教諭)、17~20

現場学習の評価、酒井持(神奈川女子附小教諭)、21~24

現場学習に対する社会的要求への適応、佐柳正(香川師範学校女子部附属小学校)、25~27

現場学習座談会、28~31

出席者 上田薫(文部事務官)・樋口澄雄(桜田小学校)・桜福之助(東京第二師範附属

小学校)・笹川正人(新潟大学第二師範附属小学校)、司会 山崎喜与作
六年単元「子供銀行」指導案、上条為人、32～36
紹介、37

社会科教育研究社編 小学校中学校社会科単元の基底
新潟第二師範附属小学校著 教育課程の構成と実践
世界史の構想、有高巖、38～42

「世界史の構想」について、(編集部)、42
コア・カリキュラムへの提言ー現実の場より梅根先生へー、築山正次(北海道比布中学教諭)、
38～41

「国史教育の反省」について、有高巖、43
有高巖先生の訪問を受けて、菅野二郎、43

鐘の音、(鳴海)、44～45

書評 歴史教育書展望、編集部、46

集団〔グループ〕の訓練〔N・E・A誌より〕、ルース・カニンガム及びその同僚(ニューヨ
ーク州コロンビア大学・師範学校の教師達)、47～48

ガイダンスの実例、24

編集後記

第27号 特輯 職業教育と社会科 1950(昭和25)年1月1日

口絵 アメリカの学校のクラブ活動

巻頭言 生活教育と職業指導、(稲谷記)、1

職業教育より見たる学校制度、安藤暁雄(東京教育大学助教授・文理大講師)、2～5

遊びと仕事ー小学校における生産教育についてー、梅根悟(東京教育大学教授)、6～8

中学校高等学校における職業教育、金子孫男、9～12

中学校の職業教育とそのカリキュラム構成、野瀬吉栄(新潟市立白新中学校)、13～16

社会的職業的生活経験の指導、寺門光輝(茨城大学茨城師範学校附属愛宕小中学校)、17～23
学校訪問記、24～27

東京愛宕中学校、(山崎記)、横浜根岸中学校、(佐藤生)

学習活動選択の一類型ー学習活動のある一つのとり方ー、三宅茂(明石師範附属小学校教諭)、
28～30

五年単元「食料と燃料」指導案 六年単元「商業と経済」指導案、函館社会科懇話会基底、
31～34

大学入学試験問題と高等学校ーとくに日本史教育の立場からー、太田貢、35～37

視学の仕事について、ウィリアム・アイザック(ニューヨーク市コロンビア・ハイスクール)、
ジュールズ・コロドニー(ニューヨーク市ブルックリンテイルデン・ハイスクール)、38～39
鐘の音、(鳴海)、40～41

時事問題とその単元構成、菊地次男(水戸第一高等学校教諭)、42～45

特別教科活動としての生徒自治指導について、松岡進(愛媛県越智郡盛口中学校)、46～47

あとしまつはなぜしにくいのか(児童調査)、高橋健治(秋田師範学校附属小学校)、47～48
訂正、32

教育ニュース、△あけてくやしいルリの壺、△宗教教育の範囲、38

文部省の「民主主義」の新単元(学習指導要領改訂までの暫定措置)、45

編集後記

第28号 特輯 企画・構成活動 1950 (昭和25) 年2月1日

口絵

巻頭言 計画の教育、(山崎)、1

児童の企画構成活動とその指導の問題、三木安正、2~4

企画能力の発達、青木誠四郎 (東京家政大学学長)、5~7

低学年の環境構成とその活用、山下正雄 (東京学芸大学竹早附属小学校)、8~10

社会科学習に於ける企画構成活動の実際—中学生の場合—、八木三郎 (東京第二師範学校附属中学校教官)、11~13

座談会 企画・構成活動の実際、14~18

上田薫 (文部事務官)・大川弘治 (東京窪町小学校)・山口愛子 (御茶水大学附属小学校)・
山崎喜与作

単元展開

一年単元「冬のあそび」、高知師範第一附属小学校、19

三年単元「たべものと着物」、奈良県基底、20

五年単元「衣食住の発達とその資源」、福島県双葉郡浪江小学校、21~24

中学一年「学校は社会生活に対してどんな意味を持っているだろうか」岩手県和賀郡基底
(第二支会)、24~26

時事問題「不良化防止」をどう扱ったか、山口弥一郎(福島県立会津女子高等学校)、28~30

民主教育の歩みを見る—教育と社会との関連から—、クロタキ・チカラ、31~34

科学的な教育—「考える子供たち」[角川書店]を読んで—、井上芳雄、22~24

動向 考古学の動きと社会科、編集部、35

若きオーストラリア人のための図書館及び手業センター、スーザン・バリー、36~38

我が校教育目標設定の手続について、堀井喜一郎 (秋田市立明德小学校長)、39~41

鐘の音、(鳴海)、42~43

社会科世界史の構成、石木誠一 (石神井高等学校)、44~45

中学校の社会科教科書の活用について、近藤福太郎 (愛媛県越智郡桜井中学校)、46・38

記事紹介、47~48

〔無題〕、(S)、18

教育界寸言、(稲谷)、26

社会科歴史教育指導誌「歴史教室」発刊についての御挨拶、歴史教育者協議会、27

現代中学生気質、34

学生喫茶店談義、(N 記者)、38

編集後記

第29号 特輯 社会科と評価 1950 (昭和25) 年3月1日

口絵

巻頭言 指導の反省、(山崎)、1

教育評価の意義と動向、矢口新 (中央教育研究所所員)、2~5

学習評価の問題—主として五段階法について—、井坂行男(文部省初等中等教育課事務官)、6
~8

社会科の指導と評価の実際

低学年社会科における「ごっこ遊び」と評価、日下部しげ (東京都桜田小学校)、9~12

中学年の共同学習における評価、石山忠造（東京高師附属小学校）、12～15
高学年の現場学習の効果判定、山崎巳代治（神奈川師範附属小学校）、15～18
中学校における討議学習評価の方法、古関富男（福島大学附属中学校）、18～23
効果判定の結果をどのように有効に役立たせたか、萩野守（宮城県亘理郡山下中学校）、
23～25
図書紹介 「わが村の研究」〔福島県金谷川村小学校六年尾形博著、羽田書店〕と「村の子供
の社会科」〔竹中輝夫・寒川万七、社会科教育研究社〕、(山崎)、26～27
単元展開
一年単元「たのしい学校」、茨城大学茨城師範附属愛宕小学校、28～31
三年単元「動植物と人間生活」、福島県双葉郡北双社会科研究会、31～33
五年単元「食物と健康」、岩手県胆沢郡社会科研究室、33～37
中学一年単元「中学生活の設計」、茨城大学茨城師範附属愛宕中学校、38～39
教科のワクをとくということー教育と生活のむすびつきということに関連してー、平湯一仁、
40～43
鐘の音、(鳴海)、44～45
書評 ホームア・レイン著「親と教師に語る」〔日本評論社〕、大江匡輝(安田学園教諭)、46
社会科学学習の反省、福岡伸一（鎌倉市立玉縄小学校）、47
社会科はこれからだ、宮地孝平、48
ニュース解説 元号廃止の問題、(S)、32～33
編集後記、(稲谷生)

第30号 特集 歴史教育 1950（昭和25）年5月1日

巻頭言 反省期の社会科と歴史教育、1

歴史教育者に与う、羽仁五郎、2～4

小学生のための歴史学習、和歌森太郎（東京文理大教授）、5～8

一般社会科と日本史とを総合した岡山県福田中学校プラン、はやし・まさお、14～18

福田中学校プランをみて、箭内健次（文部省事務官）、18～19

福田中学校プランについて、(T)、19

学習指導の実際

小学校単元 郷土の過去と現在の展開ー「食物と仕事」を中心とした取扱いの一例ー、千
葉徳爾（東京高師教授）、9～13

日本史単元1 原始社会、小島一仁（千葉県佐原高校教諭）、20～25

日本史単元2 古代国家の成立、谷口五男（東京教育大学附属中学校教諭）、30～34

遺跡の実地指導、和島誠一（東洋大学講師）、26～29

日本史の概説書は何を読んだらよいか、まつしま・えいいち、39～41

書評

和歌森太郎著 日本史教育の理論と実際〔小石川書房〕、今池久生、35

小西四郎著 明治維新（社会科文庫）〔三省堂〕、高橋碩一、35～36

村川堅太郎著 西洋史提要〔秀英出版〕、尾鍋輝彦、36～37

古島敏雄著 山村の構造〔日本評論社〕、平沢清人、37～38

時評、(H)・(Q)・(R)、42～43

子どもと生きる学級経営、今井鑑三（奈良女高師附属小学校教諭）、44～47

文部省公報 中等社会科の改訂単元について〔3月6日文中第105号〕、48～50

一般社会科、人文地理、時事問題
謹告、社会科教育研究社、51
「社会科教育」編集委員紹介、51
ニュース 対馬の科学調査団メンバーと研究テーマ、25
ニュース 科学者百六名の平和声明、47
〔雑誌の抜粋〕、34・41
編集後記、52

第31号 特集 視覚教育 1950(昭和25)年6月1日

現代教育における視覚教育の役割、吉田昇(御茶ノ水大学講師)、2~4
アメリカの視聴覚教育、倉沢剛、6~9
ソヴェトにおける視覚教育、土方敬太、10~12
学習活動の実際
幻灯を利用した単元の展開—漁港の模型を作るまで—、伊東美治(東京都港区立桜田小学校教諭)、13~15
わが校に於ける映画教育の経営、小野安正(大津市立晴嵐小学校)、16~17
六年単元「公衆衛生」における視覚教具の活用、田中卓美(新潟第一師範附属小学校教諭)、18~20
社会科と紙芝居、佐木秋夫(民主紙芝居人集団委員長・教育紙芝居研究会会長)、21~23
はじめて視覚教育を行う方へ、高萩龍太郎(東京都港区南山小学校教諭)、24~27
アメリカ民主主義の「聖典」—ジェファソンの第一次大統領就任演説—、中屋健一(東大新聞研究室助教授)、28~33
美術を見るために—博物館見学の場合—、吉沢忠(元国立博物館館員)、34~37
時評、38~39
学力の低下、(H) 暴力論、(Q)
生徒と共に史跡を歩く教師の記、伊藤好一(東京都明治中学校教諭)、40~42
書評
日本の国ができるまで—目で見る日本史— [高橋碩一・松島栄一、日本評論社]、多胡隆(日本映画社プロデューサー)・小口賢(東京都立第五商業高校教諭)・松本新八郎(東京都立大学講師)、43~44
世界史アルバム [京大西洋史研究室、創元社]、尾鍋輝彦(成城大教授)・坂本義夫(東京都立向丘本郷高等学校教諭)・野原四郎(中国研究所員)、39、44~45
単元学習の前進—単元の類型と展開について—、大野与蔵(富山大学富山師範学校附属小学校教諭)、46~48
おわび [誤字訂正]、15
歴史教育界ニュース、33
編集後記

第32号 特集 自由か、規律か 1950(昭和25)年8月1日

学校教育としつけの問題、霜田静志、2~5
教育における自由としつけ、山下俊郎(東京文理大)、6~8
池田潔著自由と規律、今久池生、8 [目次になし]
羨の実践記録

学校における躰をどうするか “私の学校、学級ではこうやっています”、菅根祥子（東京金華小学校）、9～13
 子供のしつけについて、井上喜一郎（神奈川県福沢小学校）、14～16
 わが校における躰の実際について、大川譲（東京下谷中学校）、17～19
 郷土を忘れた社会科、岡村通男（秩父高校教諭）、16〔目次になし〕
 研究会ニュース 歴史教育者協議会定例研究会報告及討論要旨、19
 シンポジウム 社会としつけの問題
 提案 しつけをどう扱ったか、松村謙（東京第二師範女子部附属小学校教諭）、20～23
 批判1 「しつけ」の説明がたりない、山田一枝（成城学園教諭）、23～24
 批判2 社会科としつけの問題について—松村氏の手記を読んで—、大橋富貴子（お茶の水大学附属小学校教諭）、24～25
 批判3 社会としつけ、上田薫（文部事務官）、25～26
 能力ということ、中野佐三（東京教育大学教授）、27～29
 ガイダンスの編成、マール・M・オールセン（ワシントン州立大学師範学校教授）、グラント・ヴェン（ヤキマ公立学校ガイダンス協力員）、30～31
 生徒の作品によせられて、31
 書評 矢川徳光氏の「反コア・カリキュラム論」について、海後勝雄（コア・カリキュラム連盟幹事長）、32
 書評 方法論の勝利—矢川氏の労作を読んで—、高橋碩一（歴史教育者協議会書記長）、33
 第二特集 文部省著作小学校社会科学習指導要領をめぐって
 使用法をめぐって、馬場四郎（国立教育研究所員）、34～37
 実践者の立場から見て、柴田勝（成城学園教諭）、37～42
 「小学校社会科学習指導法」雑感、国分一太郎、42～45
 時評、46～47
 連載講座 社会調査の意義と方法、福武直（東大助教授）、49、52
 全世界の教育学者に送る日本の教育学者の平和の呼びかけ、5
 脚下を見ない社会科、（稲谷生）、26
 Book of Books、48
 日教組の平和声明（七月九日）、52
 編集後記

第33号 特集 教科書の批判と取り扱い 1950（昭和25）年9月1日

教科書はいるか、いらぬか、岡津守彦（東大講師）、2～4

シンポジウム

提案 社会科学習に於ける教科書の利用—四年・“館山市の発達”指導の実際—、安田豊作、5～8

批判1 社会科教科書とその利用について、山本甫十（東京都中央区立築地小学校教諭）、8～9

批判2 感ずるまま、小山昌一（東京学芸大学豊島附属小学校教諭）、9～10

批判3 積極的活用態度は注目に値する、大野連太郎（文部省事務官）、10～11

実践記録

私は教科書使用をこう考え、このように実践している—中学校の場合—、古関富男（福島大学附属中学校）、18～21

社会科の指導に『人文地理』の教科書をどう役立てたか—高等学校の場合—、山口弥一郎
(福島県会津女子高校教諭)、22~24
日本史学習と参考書について、大江匡輝(東京・安田学園教諭)、25~26
座談会 社会科検定教科書について、11~17
出席者 尾鍋輝彦・大江匡輝・高橋碩一・松島栄一、司会者 山崎喜与作
時評 「歴史教育」・「ピカドン」—都会の友へのたより—、(X)・(R)、42~43
単元の展開 日本史単元3 貴族社会、菅野二郎(東京都文京高校教諭)、30~33
ルポルタージュ ある社会科をたずねて、田井二郎(岡山県福田中学校教諭)、34~35
社会科世界史の新著について—世界史の理解のために米国史研究者としての立場から—、
中屋健一(東大助教授)、36~41
教育界めぐり 秋田・青森・新潟の巻、27~29
連載講座 社会調査の意義と方法(二)、福武直(東京大学助教授)、44~48
『教科書についての米国教育施設団報告書抜粋』、4
教壇雑詠、鶴生、21
〔誤字訂正〕、33
作法のカリキュラム、稲谷生、48
編集後記

第34号 特集 社会科と国語教育 1950(昭和25)年10月1日

言語教育と論理的指導—新しい社会科教育のために—、大久保忠利(民主主義科学者協会
言語科学部会会員)、2~5
ほんとの「国語白書」え、クロタキ・チカラ(民科言語科学部会会員)、6~9
真実な社会科を築くために—綴方の復興について—、国分一太郎(教育評論家)、10~13
小学校生活と綴方—いくつかのスケッチ—、豊田正子、14~16
紹介 国語審議会『国語問題要綱』、6~9
実践と研究の報告
社会科の指導に於いて国語教育をどう扱ったか—社会科と国語科との連関—、高橋貞行(東
京都富士見小学校)、17~19
低学年社会科学習に於ける言語学習、森久保仙太郎(東京都和光学園)、19~22
社会科および国語教育、歴史教育者協議会福田支部、22~24
鐘の音、(鳴海)、16
アメリカにおける中等学校の断片、元喜真佐子、28~29
時評、(F)、30~31
学習指導の実際 日本史単元4 封建社会の成立(1)、小島一仁、25~28
文部省公報 中学校「一般社会科」単元の要綱について、32~41
文部省公報 高等学校「一般社会科」単元の要綱について、41~44
社会調査の意義と方法(完)、福武直、45~48、9
〔短歌〕、稲谷生、24
編集後記

第35号 特集 社会科と郷土研究 1950(昭和25)年12月1日

郷土誌研究の意義、石田龍太郎(東京一橋大学教授)、2~4
社会科に於ける地方史研究の意義、古島敏雄(東大農学部助教授)、4~6

社会科教育と郷土調査、米林富男（東洋大学教授）、6～8
農村の微細地誌研究一例を房総東南部にとつて、尾崎虎四郎（東京学芸大学教授）、9～12
ある中学校の郷土研究室の思い出、まつしま・えいいち（早大）、13～14
社会科学学習に於ける地図指導の一端、吉井永（千葉県東金中学校教諭）、15～17
郷土研究の作品をみて―その紹介と批判―、編集部、18～22
学習指導の実際 日本史単元5 封建社会の成立（二）、小島一仁（千葉県佐原高校教諭・歴史教育者協議会委員）、23～26
時評、(H)・(X)、40～41
書評
山田清人著『全村学校』、奥田美穂、37
宮原誠一編『社会教育』、大浦猛、37～39
東京教育大学教育学研究室編『社会科教育』、山崎喜与作、39
知能の遅れた児童の教育〔CIE 提供「クリスチアン・サイエンスモニター」7月1日号〕、ベツシー・ジョーンズ、42～43
紹介 毎日出版文化賞にかがやく良書、(山崎)、47～(49)
教育における一九三〇年前後をどうまんだらよいか―現場からの問題提起―、あいだ・みのる、44～45
郷土の歴史をたずねて―瀬戸内海の子の歴史的性格について―、松岡進（愛媛県盛口中学校教諭）、45～46
文部省公報 高等学校「社会科」単元の要綱について（続）
社会科世界史の学習について、27～30 人文地理、30～33 時事問題、33～36
〔歴史教育者協議会声明〕、17
ニュース 学界と教育界、43
編集後記

第36号 特集 社会科と新聞 1951（昭和26）年2月1日

学校における新聞、海後宗臣（東大教授）、2～5
海外の新聞を較べて、高松棟一郎（東大教授）、6～9
新聞を学校教育にどう利用するか、木原暁（東京都麹町中学校教諭）、10～12
社会問題と学校教育―池上の特飲街問題をめぐつて―、水上波男、18～20
新聞に望む、山崎喜与作、31～32
座談会 新聞について―新聞のよみ方と学校新聞―、13～17
小山和薈（早稲田高等学院3年）、深谷博彦（同1年）、田島義基（都立九段高校2年）、
鬼塚日出男（同1年）・長谷川隆（東京四谷第一中学校2年）・内田恵美子（同2年）・
古川昌宏（東京麹町中学校3年）・茂木益男（同3年）・山崎喜与作（司会）
大衆小説と社会科、高橋碩一（歴史教育者協議会書記長）、21～24
歴史教育の態度と技能、酒井忠雄（大阪学芸大学教授）、25～28
時評、(H)・(R)、38～39
学習指導の実際 日本史単元6 封建社会の統一、小島一仁、33～37
書評
川崎庸之編『人物日本史』〔毎日新聞社〕、永田恭子、40
尾崎虎四郎著『社会科教育』〔岩崎書店〕、山崎喜与作、40～41
高橋哲夫著『新しい歴史教育』、豊田佐喜雄、37

奈良女子高師附属小学校学習研究会著『正しいしつけ』〔秀英出版〕、41
成人教育に関する公的支援〔CIE 提供「学校行政」1950年7月号〕、ラルフ・W・ヂェリー
（ケンタッキー州オーウエンスボロー視学官）、42～44
紹介 小学生の郷土産業の研究、(S)、41
討議学習の指導—中学校の場合—、金岡照（広島大学三原分校附属中学教諭）、28
社会科の反省と前進、石本正隆（徳島県石井中学校）、45～46
社会科と修身復活—修身復活論のよつて来たるもの—、築山正次（北海道神居中学校教諭）、
46～47
本校の礼法指導、鈴木武記（岩手県真城中学校）、47～48
ルポルタージュ 全国社会科研究協議会大会を見る、（記者）、29～31
〔新聞に関するデータ〕、5、9
珍語珍談、(S)、48
編集後記

第37号 特集 進学と就職 1951（昭和26）年3月1日

新道徳教育論、長田新（広島文理科大学教授）、2～6
上級学校進学の問題、金子孫市（東京文理科大学助手）、7～9
アチーヴメント・テストについて、南本宏（東京都麹町中学校教諭）、10～11
インターヴュー 進学指導について、山崎喜与作、17～20
アンケート 各校の進学指導について、17～20
職業選択の指導とその実績、新潟市白新中学校（文責 田中武雄）、12～14
職業指導と地域社会の協力、登坂一雄（東京都墨田区立寺島中学校）、15～16
一二、〇〇〇名にわたる小学校社会科の地域一斉テストの実践報告、山形県東村山郡教職員
組合文教部、21～25
批判、宮原誠一・班目文雄・小沢圭介、25～26
日本史単元7 江戸幕府の政治と民衆生活、小島一仁（千葉県佐原高校教諭）、36～39
東京都 アチーヴ騒動記、(O)、27～28
「おぼろ駕籠」と「風にそよぐ葦」—大衆文学と社会科—、高橋碩一、29～32
書評、33～36
オーエン・ラティモア著『中国』〔岩波新書〕、斎藤秋男（中国研究所員）
オーエン・ラティモア著『アジアの情勢』〔日本評論社〕、山崎喜与作
『新しいアジア』（岡倉古志郎著）と『近代中国』（北山康夫著）、山崎喜与作
民主教育の盲点、山村稔、42～43
時評、(A)・(R)・(I)、40～41
社会科の持つ科学性について、佐藤薫（愛知県中島郡平和中学校教諭）、45～46
紹介
鳥取県邑法第一中学校「私たちの邑法郷」、(S)、44
一般雑誌にとりあげられた教育問題、47～48
天野文相と修身科、6
春五句、16
中等教科書編集委員会『日本のあゆみ』、39
学童吟、46
編集後記

第38号 特集 新単元をどう生かすか 1951（昭和26）年5月1日

日本の社会科と欧米の教育、保柳睦美（文部省中等教育課指導部長・理学博士）、2～5
改訂小学校社会科指導要領 基底例の活用、上条為人（長野大学松本附属小学校教諭）、6～10
我が校の改訂単元、北海道上川郡神居中学校（報告者・築山正次）、11～17
単元の展開「学校や家庭の生活」（中学一年 四、五月）、石田耕吾（新潟県直江津中学校）、
25～28

座談会 中学校社会科 改訂単元の活かし方、18～24

松島栄一（史料編纂所員）・高橋碩一（歴史教育者協議会書記長）・松崎るみ（埼玉蕨中
学校）・大江匡輝（安田学園）・今井恒彦（湘南学園）・山崎喜与作（司会）

時評、17、(N)、34

日本史単元8 明治維新、小島一仁、29～34

肉体文学その後—大衆文学と社会科—、高橋碩一、35～40

書評

新しい綴方教室・山芋・山びこ学校・子どもの抗議—生活教育の輝ける成果—、まつしま・
えいいち（東大史料編纂所員）、41～43

斎藤秋男著「新中国の教育建設」、安藤彦太郎、43～44

世界史の「検定教科書」について、石木誠一（東京・石神井高校教諭）、45～47

映画教室の指導、熊田進（神戸大学映画研究会員）、50～52

我が国の天然資源の保護を促進する法案〔CIE提供 “School Board Journal” 誌より〕、イ
レイン・エクストン、53～54

紹介

一郡連合の『名西中学新聞』、(稲谷生)、48～49

子供と新聞、林田正雄（長崎県南高来郡山田村立第一中学校教諭）、49

文部省発表 社会科日本史の単元について、55～64

紹介 尾崎虎四郎編著『郷土地誌提要』〔三省堂〕、山崎喜与作、28

読者からの便り、54

選挙風景雑感、(S)、64

編集後記